はじめに

言語文化教育の思想とは何か

あたたかい眼ざしの語り手として

細川　英雄*

言語文化教育とは，ことばと文化の教育を考える教育研究分野である。

ことばと文化の教育とは，人がことばを使って社会の中で生きていくことの意味を追及する教育実践のことである。この場合の教育とは，「教える」という意味ではない。人が形成されることを，ここでは「教育」と考えている。

こうした意味づけは，現在の日本語教育の世界とは程遠いように聞こえるかもしれない。

それは，日本語教育自体にそうした「形成」の発想が欠如しているからなのだろう。というよりも，言語教育といったときに，すでに，こうした「形成」の意味は排除されているようだ。だからこそ，ここでは，言語教育ではなく，あえて言語文化教育という名称を使っている。

ことばと文化の教育の意味を強く意識するようになったのは，1998 年から日本語センターで始まった新カリキュラムの中での「総合活動型日本語教育」の位置づけをめぐってであった。自らの教育実践の中から生まれ出ることばと文化の教育の問題をテーマとし，その理念と方法論の関係を模索するうちにたどりついたのが，言語文化教育の思想である。この活動は，その後，「考えるための日本語」というコンセプトの下で発展し，現在，「活動型日本語教育」の名のもとに，日本語教育において広がりを見せている。

一方，2001 年に開設された大学院日本語教育研究科での教員養成活動をベースに，書くことと考えることの関係，研究と教育を結ぶ意味，そして「実践＝研究」という思想の展開をめざしてきた。ここで考えたことは，思

* 言語文化教育研究会代表（hosokawa@waseda.jp）

考と表現の循環こそが，人をつくるということである。

私たちの生きる社会と，ことばと文化の意味について考えることは，これからの言語教育にとって不可避の課題である。一人の市民であるために，クレア・クラムシュの「第三の場所」，マイケル・バイラムの「第三の社会化」を超えて，個人が充実した言語活動主体となり得るためには，さまざまな問いが待ち受けている。

人間が人間らしく生きていくために，私たちは何をどのように学ぶのか。そのためには，どのような環境，どのような教育が必要なのだろうか。

今，この 10 年を振り返りつつ思うことは，私たち一人ひとりがどのような語り手として何を表現し，どのような社会をつくっていけるのかという課題である。閉塞した政治状況，経済一辺倒の傾向のなかで，ことばの教育には何ができるのだろうか。

深く考え，決して倚りかからず，人間の生き方へのあたたかい眼ざしを語る，言語文化教育学は，そうした研究でありたいと願うばかりである。

*

2001 年の大学院日本語教育研究科開設とほぼ同時に立ち上がった，この雑誌も，早いもので創刊から 10 年が経ち，通巻 11 号を数えることになった。

もともとは同研究科言語文化教育研究室の研究室誌として出発した本誌であるが，その後，早稲田大学日本語教育研究センター・言語文化教育研究会の会誌となり，次号からは，任意団体・言語文化教育研究所の機関誌となるため，本号は，日本語センターの研究会から発行される雑誌としては，その最終号となる。

（ほそかわ　ひでお）

編集委員（50 音順）
牛窪隆太（特集号編集代表），佐藤貴仁，田中里奈，張珍華，古屋憲章，山本晋也

査読協力者（50 音順）
市嶋典子，牛窪隆太，佐藤貴仁，塩谷奈緒子，牲川波都季，田中里奈，張珍華，鄭京姫，古屋憲章，三代純平，山本冴里，山本晋也

言語文化教育研究　第 11 巻
特集号「言語文化教育の思想」

発　行　日　2013 年 3 月 26 日
編集責任者　細川英雄
発行・編集　早稲田大学日本語教育研究センター　言語文化教育研究会
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14-705
http://gbkk.jpn.org/
D　T　P　ケイ商店

© 2013 本書の一部または全部について，著作者から承諾を得ずに複写・複製・転載することは，著作権法上での例外を除き，禁じられています。